

## シーボルト『NIPPON』の原画・下絵・図版

宮崎, 克則  
西南学院大学国際文化学部

<https://doi.org/10.15017/25337>

---

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告. 9, pp.19-45, 2011-03. The Kyushu University Museum  
バージョン：  
権利関係：



# シーボルト『NIPPON』の原画・下絵・図版

宮崎克則

The Original, Rough sketch and Make-up of Siebold 'NIPPON'

Katsunori MIYAZAKI

西南学院大学国際文化学部：〒 814-8511 福岡市早良区西新 6-2-92  
The Seinan University, Nishijin 6-2-92, Sawara-ku, Fukuoka 814-8511, Japan

## はじめに

ドイツのヘッセン州、シュルヒテルン市郊外にあるエルム村の丘にブランデンシュタイン城がある。この当主であるコンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン氏は、シーボルトが1845年に結婚したヘレーネとの間にもうけた5人の子供のうち、次女マチルデ・フォン・ブランデンシュタインの子孫である。ヨーロッパ在住のシーボルト子孫のうち、今日もシーボルト家の顕彰を続けているのはフォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家だけであり、城の一角を改装して博物館が設けられている。そこにはシーボルトばかりでなく、長男のアレクサンダー・フォン・シーボルト(1846～1911年)、次男ハインリッヒ・フォン・シーボルト(1852～1908年)の個人的な資料も保管されている<sup>(1)</sup>。

2006年と2008年の夏、短期間ではあったが、ブランデンシュタイン氏のご厚意により博物館にあるシーボルト関係資料、とくに絵画を調査・撮影することができた。同城にある草稿類や手紙などは1990年に長崎市教育委員会がマイクロフィルム撮影し、すでに目録も出て閲覧可能となっている<sup>(2)</sup>。絵画類のなかに、江戸参府に随行した川原慶賀のスケッチ画があり、また『NIPPON』図版を作るための下絵があった。

本稿の課題は、原画、下絵そして『NIPPON』図版を

ブランデンシュタイン城(2006年撮影)



比べることによって、そこにどのような「変化」があるのかを検討することにある。「変化」があるならば、そこにはシーボルトの「意図」があるはずである。どのような「意図」があるのだろうか。『NIPPON』図版367枚のすべてについて検討することはできないので、ここでは特徴的なくつかりを取り上げた。

### 【註】

- (1) 宮坂正英「古城に眠るシーボルト文書」(ヨセフクライナー編「黄昏のドクガワ・ジャパン」NHKブックス842、1998年)  
(2) 『フォン・ブランデンシュタイン家所蔵シーボルト関係文書 マイクロフィルム目録』(長崎市、2005年)、長崎のシーボルト記念館にて閲覧可能

# 1. 石版印刷とシーボルト『NIPPON』図版

1445年頃、ドイツ出身の金属加工職人グーテンベルクが活字を発明したことによって、文字をあらかじめ金属で鋳造し、それを組み合わせてプレス機で刷る活版印刷が始まった。これ以降、「42行聖書」を始め多くの本がヨーロッパ各地で印刷されることになる。当初は文字だけであったが、1460年頃から挿絵が組み込まれるようになる。挿絵は木版から銅版へ、そして石版による版画が流行する。シーボルト『NIPPON』が出版される1830年代は石版の時代であった。

木版は線や面など図柄として描きたい部分を残し、それ以外の部分を取り去って版を作る。絵の具や墨などを版のでっぱった部分に塗って紙をのせバレンでこすったり、プレスして印刷する。凸版である。これとは逆に、版上にくぼみ状の溝を作り、そこにインクを詰めて表面の余分なインクを拭き取ってから紙をのせ、圧力をかけてそのインクを刷り取る凹版がある。18世紀以前においては、単に版画といえば、多くの場合は銅による凹版画を指していた。銅版に直接に凹部を刻む直接法と、酸などの浸食作用を利用して凹部を作るの間接法があり、後者はエッチングまたは腐食銅版画という。

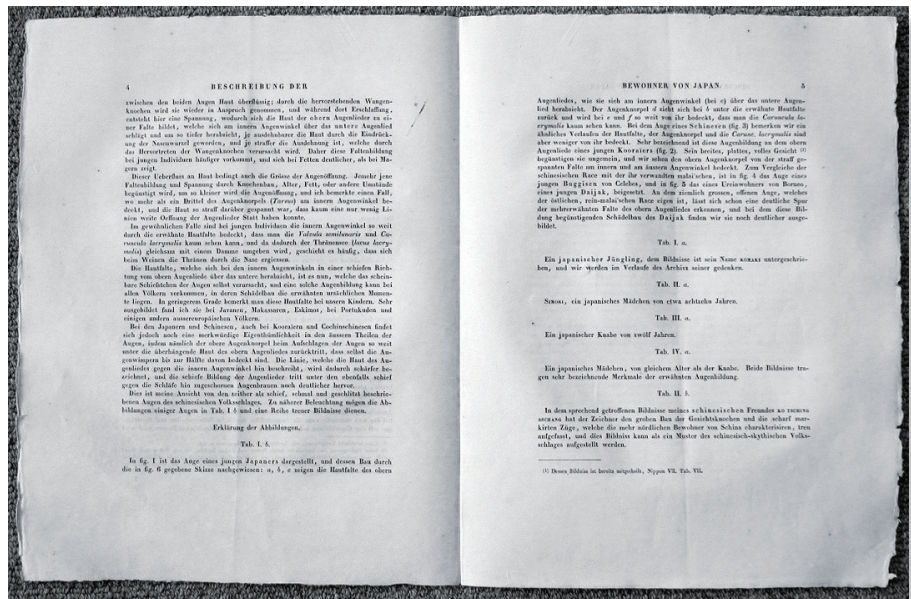
1798年頃、ドイツで凸版でも凹版でもない新たな印刷術が発明され、19-20世紀の印刷術・版芸術に計り知れない影響を与えた。考案したのはアロイス・ゼネフェルダー(1771-1834年)である。彼の父親はマンハイムの宮廷劇場の俳優であり、そのためかゼネフェルダーは年少の頃から演劇への熱い思いを抱いていた。盛んに戯曲や詩を創作して出版することを願っていたが、当時の印刷術では経費がかさみすぎるので、廉価な印刷術を編み出そうと思い立ち、試案を重ねた末、1798年頃に石灰石を使用した石版印刷術を完成させた。その方法を簡単に述べると、高純度の石灰石に脂肪性のクレヨンやインクなどで絵を描き、次

(1) シーボルト『NIPPON』の図版(石版)



防備施設 縦59.5cm×横39.5cm 九州大学付属図書館医学分館蔵

(2) シーボルト『NIPPON』の本文(活版)



縦39.5cm×横59.5cm 九州大学付属図書館医学分館蔵

〔3〕 1727年.ケンペル『日本誌』の口絵(銅版)



九州大学附属図書館医学分館蔵(D-K11-1729)

に弱酸性溶液(アラビアゴムと硝酸の混合液)を塗る。化学反応によって描かれた部分は油性物質を強く引きつける力を持ち、描かれていない部分は水分を保持するようになる。こうして石版上に水分を弾く部分と保持する部分ができる。石版を水で湿らせたのち、印刷用の油性インクをのせると、絵を描いた部分にのみインクは付着し、その他の部分ではインクが弾かれる。そして紙をのせ刷り機にかけるのである。原版に凹凸をつけることなく、平坦な面で印刷することから平版印刷ともよばれる(石灰石は重くかさばるので、現在ではアルミなどの金属板も使用されている)。脂肪性のインクを用いてペンで描画すればデッサンの調子が出せ、描き方によってはエッチングに類似した線の表現も可能となる。また脂肪性チョークを使えば鉛筆デッサンやクレヨンデッサンに近い描画もできる。石版は多様な表現ができるのである<sup>(1)</sup>。

シーボルト『NIPPON』の初版は、図版編と本文編からなり、1832年から20年以上にわたってオランダのライ

〔4〕 1832年.シーボルト『NIPPON』の口絵(石版)

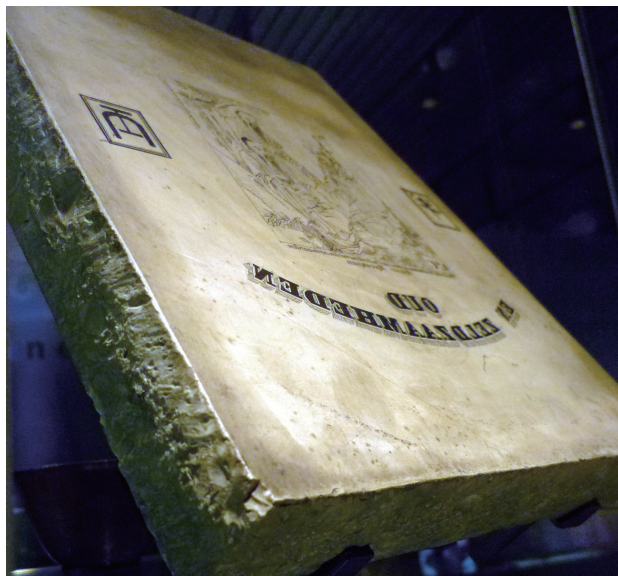


九州大学附属図書館医学分館蔵

デンで自費出版された。図版編は石版印刷、本文編は活版印刷である。ともに使用された紙は当時のオランダで定評のあったファン・ヘルダー社製であり、「VANGELDER」あるいは「VG」の透かしがある(紙の製法は、「ほろ」とよばれる布きれや古い網、あるいは藁などを臼に入れて杵ですりつぶし、これを紙漉き用の水槽に浸し、「漉き桁」という網をはめ込んだ木枠で漉いた。原料は和紙と異なるが、ともに手漉きである)。図版にはしなやかで厚手の紙が用いられ、本文はより薄い紙が使われている。本文は1枚の紙の両面に4ページ分が活版印刷され、半分に折りたたまれて配本された(『NIPPON』は未製本の状態で配本された)<sup>(2)</sup>。

銅版画と石版画の比較のために、シーボルトより約100年前に来日したケンペル『日本誌』をあげよう。〔3〕は1727年に出た英語版『日本誌』の口絵、銅版で印刷されており、近くで見ると絵の全体が線で描かれている。これに対し、〔4〕は1832年の第1回配本で出た『NIPPON』口絵、石版による印刷である。

〔5〕 石版



ライデン国立民族学博物館展示室

〔6〕 『日本国の知識への寄与』の挿絵



九州大学付属図書館蔵(576.0.3)

シーボルトが『NIPPON』で使用した石版は現在のところ1枚も発見されていない。再利用が可能であるから、他に使用された可能性が高い。オランダのライデン国立民族学博物館には、フィッセルが使用した石版が展示されているので、参考のためにその画像を掲示しておく。〔5〕は厚さは4センチほどの石版である。オーフェルメール・フィッセル(1800-1848)は、オランダ商館員として文政3年(1820)から文政12年(1829)まで日本に滞在した。文政5年(1822)には商館長ブロンホフ(1779-1853)に

随行して江戸参府している。帰国後の1833年に刊行した『日本国の知識への寄与』<sup>(3)</sup>の挿絵に使用された石版ではなく、試作の石版と思われる。〔6〕に例示しているように、下部のタイトル、「両」文字の飾りが異なっている。

【註】

- (1) 町田市立国際版画美術館編『改訂版 版画の技法と表現』(町田市立国際版画美術館、1987年)
- (2) 宮崎克則「復元:シーボルト『NIPPON』の配本」(『九州大学総合研究博物館研究報告』3号、2005年)
- (3) 沼田次郎他訳『日本風俗備考』1.2巻(平凡社、東洋文庫326、1978年)

## 2. 石の宝殿

まず、石の宝殿が描かれた状況から解説しよう。文政9年1月9日(1826年2月15日)、来日3年目のシーボルトは、商館長スチュルレル、薬剤師ビュルガーとともに143日間の江戸参府に出発した。

オランダ商館長の江戸参府は、寛永10年(1633)から嘉永3年(1850)まで166回を数える。その目的は、將軍に謁見し、お礼を言上、献上物を呈上することによって、有利な対日貿易の継続を謝すことにあった。寛政2年(1790)から貿易額半減にともなう4年に1度となる。通常の参府人数は59人が規定で、大坂雇いの者13人を入れても70人前後であったが、シーボルトは自らの調査・研究への協力者や門人、絵師の川原慶賀らを一

に加えており、総勢は107人の多さであった。また所要日数も通常は90日ほどであったが、シーボルトは事あるごとに延長作戦をとり143日におよんだ<sup>(1)</sup>。

長崎～下関は、はじめ海路であったが、船旅の不安定な危険をさけて、万治2年(1659)からその大部分を陸路にとり、長崎街道を通して小倉に至った。小倉から下関へ小舟で渡海し、ここで「日吉丸」の到着を待つ。「日吉丸」は瀬戸内海を航行するための和船であり、オランダ商館がチャーターした。瀬戸内の室津(兵庫県たつの市)か兵庫で上陸し、大坂・京都を経由して江戸に至る。シーボルトたちの場合、1月9日(2月15日)に長崎発、1月15日(2月21日)に小倉着、翌日に小舟で下関へ渡る。

1月16日から24日までの9日間、シーボルトは下関で多数の門人たちと面会し、門人が連れてきた患者を診察するとともに、関門海峡の緯度・経度を測量し、川原慶賀=登与助に各地の景色を描かせた。『NIPPON』旅行記のなかに、

1月17日…夕方、日本人の画家登与助が竹崎からもどってきた。私は下関の西の地区の景色を写すために、彼をそこへ行かせたのであった

1月18日…私は画家の登与助や数名の門人さらに信頼のおける人びとといっしょにわざわざあとに残り、ファン・デル・カペレン海峡の見取図の最も重要な地点を決めるために観測を行った

1月19日…登与助は前景に漁師の小屋をいれて海峡の景色をスケッチし、その間われわれはコンパス測量の仕事をし

1月23日…登与助が当地に滞在中二、三の原画を写して描き上げた下関の全景は、『日本』Ⅱ第13(d)でご覧いただきたい

とある。慶賀は多忙であったろう。最後にある「下関の全景」の慶賀のスケッチ原画はブランデンシュタイン城に残っている。1月24日(3月2日)、下関を出港したシーボルトらは、上関・三原・日比に寄港し、1月29日に室津に上陸、姫路を通過して2月2日(西暦3月10日)に石の宝殿を見物する。『NIPPON』のなかの旅行記でなく、シーボルトが江戸参府中につけていた自筆「日記」からその記事をあげる<sup>(2)</sup>。

3月10日 金曜日

9時過ぎにやっと出発した。—数インチの厚さの積雪があった。温度は8時ごろで華氏40度<摂氏約4度>であった。天気はたいへん悪かった。相変わらず雪が降っていたが、同時にとけていたので、駕籠かきにとって道は難渋を極めた。—<姫路の>町と郭外の町を過ぎ、小舟で市川を渡り、骨の折れる旅を続けて曾根に着き、昼食をとった。午後にはこの地方で非常に信仰する者の多い有名な神社仏閣に、前から話し合っていた巡礼の旅を続け—曾根の松—石の宝殿と高砂に出かけた—最初のは天神が手づから(記述を参照)2.3本のマツの木を植えた伝説で、次のは巨大な石が突然あ

司馬江漢『画図西遊譚』



九州大学付属図書館蔵 「桑木文庫」(和書1508)

らわれたことで、最後のはわが国のボダイ樹のような形をしていて、今なお生き生きと枝を広く拡げているマツの木(拡げた枝は直径28~30フィートばかり)と、少な目に見積もっても300年余りたつ古い1本のマツ(記述参照)があつて有名であつた。—僧侶はたいへんな好意を示し、またとくに敬意をはらってわれわれを出迎えた。

雪が降る中、姫路を出発したシーボルトらは昼に曾根に着き、それから「巡礼の旅」をする。曾根の松、石の宝殿、高砂を見物して夜の「9時過ぎ」に加古川に着き一泊する。彼が楽しみにしていた石の宝殿などは、この地の名所であり、九州の大名たちは参勤交代の際にここを訪問するため室津に上陸すると、シーボルトは「日記」に書いている。天明8年(1788)に江戸から長崎へ旅行した司馬江漢は、その見聞記を『画図西遊譚』(寛政2年刊)にまとめた。石の宝殿などは挿絵つきで登場する。

兵庫県高砂市曾根町にある曾根天満宮には、曾根の松がある。これは、九州太宰府に流される途中の菅原道真が、日笠山に登って休み「我に罪なくば栄えよ」

と足下の小さな松を自ら植えたものだという。シーボルトも同様に記述しており、同じような話を聞いている。現在は5代目の松になっている。次に訪れた石の宝殿は、兵庫県高砂市阿弥陀町生石にある生石神社のご神体である。高さ約5.7メートル、幅約6.4メートル、奥行き約7.2メートル、重さ(推定)500トンの巨石で、7世紀初期に造られたとされ、神々の神殿だったと伝えられるが、何の目的で造られたのか未だに不明である。岩山をくり抜いて造られており、裾はひと回り奥まで面が彫られていて、水面より40cmほど浮き上がった状態に見える。司馬江漢の挿絵でも川原慶賀のスケッチでも、広い場所に石の宝殿があるように描かれているが、現実はそのようではない。ともに全体像が分かるようにデフォルメされている。生石神社は牛馬の守護神でもあり、現在もシーボルトが持ち帰ったお礼と似たようなものが売られている。

兵庫県高砂市荒井町の高砂神社に相生の松がある。シーボルトは樹齢300年と見積もっている。相生の松は、根が一つで雌雄の幹が左右に分かれた松のことで、尉(イザナギ)と姥(イザナミ)の2神が宿る霊松として人々の信仰を集めた。シーボルトが見た3代目の松は昭和12年に枯死(幹は霊松殿に保存)、現在は5代目の松が枝を張っている。シーボルトは初穂料として100疋を奉納、その包み紙が高砂神社の社務日記に貼られて保存されている。そこには、毛筆によるシーボルト自筆のサインがある<sup>(3)</sup>。

これら3か所で、シーボルトはその由来を記した刷り物をいくつも入手しており、それらはブランデンシュタイン城に今も残る。さらに慶賀がスケッチした石の宝殿の絵も残る。和紙に墨で描かれた絵は、全体像が分かるように2方面からとらえられている。石の宝殿の形は正確であるが、周囲の景色は違う。岩山をくり抜いて造られているので、2面が見えるほどの隙間はないのである。絵の右肩には「二十番 バンシウイシノホウデン」と墨書されている。同様のスケッチ画は、「五番 ウレシノユクチ」「十番 シモノセキ」「二十四番下 ヒヨウゴミナトカワ」「二十五番内 ヲヲサカモリクチニテミルヅ」「二十七番内 ミヤコニシデン」「三十二番 テンリウカワ」「エトシナカワ 四十七番」などがあり、慶賀は江戸品川までに50枚近くのスケッチをしていたことが分かる。

石の宝殿に関する絵は『NIPPON』図版として出た

分も含めて4点ある。〔7〕が和紙に描かれた慶賀のスケッチ画、現地で描かれたものであり、ブランデンシュタイン城に残る。〔8〕は洋紙に墨で描かれ、オランダのライデン国立民族学博物館にある。〔8〕の整理番号はシーボルトコレクションの1-4488であり、これは江戸参府のときの風景画をまとめたアルバムである。縦37.3cm×横55.3cmのアルバムには、彩色された街道筋の絵、墨で描かれた絵が一枚ごとに台紙に貼り付けられていた。これらの絵は、いろいろな展示会で多用されるために、現在は台紙からほとんど剥がされている。もともとはシーボルトがアルバムに仕立てていたものであり、台紙に用いられている紙は『NIPPON』にも使用しているファン・ヘルダー社製であり、「VANGELDER」の透かしがある。ライデン国立民族学博物館に残るシーボルトコレクションは、1838年に決まったシーボルトからオランダ政府へ売買されたコレクションである<sup>(4)</sup>。

以上の検討から、街道筋の風景画については、まず慶賀がスケッチを描き、後に彩色あるいは墨で洋紙に清書したものをシーボルトに提出したことが分かる。シーボルトはそれをアルバムに仕立て、後にオランダ政府に売却したのである<sup>(5)</sup>。和紙の〔7〕にある鳥居の額「石宝殿」と、洋紙の〔8〕にある筆跡は同じであり、ともに慶賀が書いている。

〔7〕の拡大図



〔8〕の拡大図



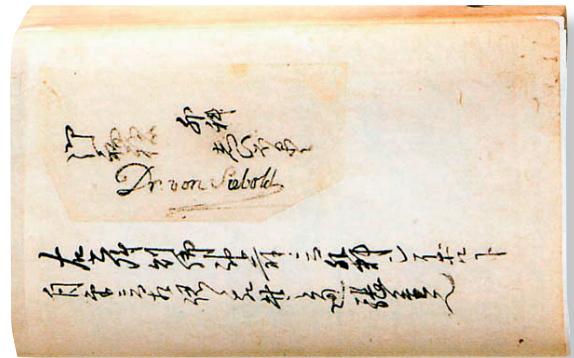
〔9〕は洋紙に水彩で描かれており、『NIPPON』図版を作るための下絵であり、ブランデンシュタイン城に残る。シーボルトがヨーロッパの画家に描かせ、台紙に貼り付けたものである。上の絵の裏には、「Das Denkmahl zu Ishi no hoden von hinten gesehen」(背後から見た石の宝殿の遺跡)、下の絵には「Das Denkmahl zu Ishi no hoden von der Seite gesehen」(側面から見た石の宝殿の遺跡)と、ドイツ語の註記がある。シーボルトの筆跡

であり、彼が図版作成のために絵を整理していた様子が分かる。〔10〕は石版に描かれ『NIPPON』図版として刊行された石の宝殿である。慶賀のスケッチから大きな変化はなく製版されたことが判明する。

〔註〕

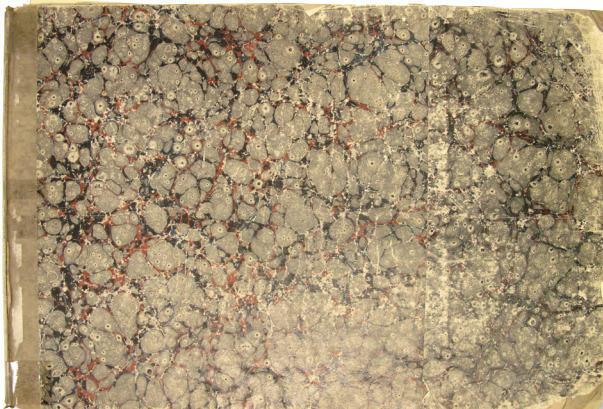
- (1) 片桐一男『江戸のオランダ人』(中公新書、2000年)  
 (2) 斎藤信訳『シーボルト 参府旅行中の日記』46頁(思文閣出版、1983年)。  
 『NIPPON』初版では、旅行記は瀬戸内の室津までの記述で中絶していた。現在、我々は『江戸参府紀行』(斎藤信訳、東洋文庫87、1997年)によって、容易にシーボルトの江戸滞在中の記録や帰路の記事を読むことができるが、それらは初版『NIPPON』には含まれていなかったのである。室津から以東の部分が出たのは明治30年(1897)に刊行された第2版においてであった。2版は、シーボルトの死去後、息子であるアレキサンダーとハイブリッヒが中心となり、日本からも旧大名の華族などが後援してシーボルトの生誕100年を記念して出版された。2版では、初版の内容が削除されたり、追加されたりした部分が多く、内容的にも形態的にも初版と大きく異なる。江戸参府の記事は、2人の息子が残っていたシーボルトの原稿をもとに修正・加筆したものである。第2版で出た石の宝殿に関する記事は、自筆「日記」とほぼ同じ内容なので、「日記」をあげた。

- (3) 高砂神社蔵、兵庫県立歴史博物館編『ものと人は船に乗って』(2009年、特別企画展図録)



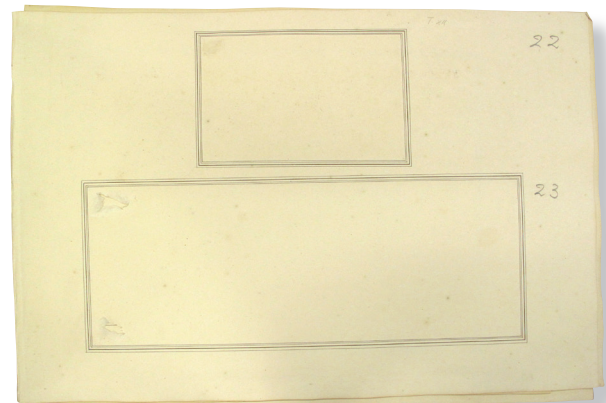
- (4) ハンス・ケルナー『シーボルト父子伝』79頁(創造社、1974年)  
 (5) 街道筋の風景画を整理したアルバムには、鳥と籠の絵1枚のみが残り、他の絵は切り取られたり、額装されている。多くの展示会で使用された結果であろう。

街道筋の風景画を整理したアルバム表紙(1-4488)



ライデン国立民族学博物館蔵

街道筋の風景画が剥がされた台紙

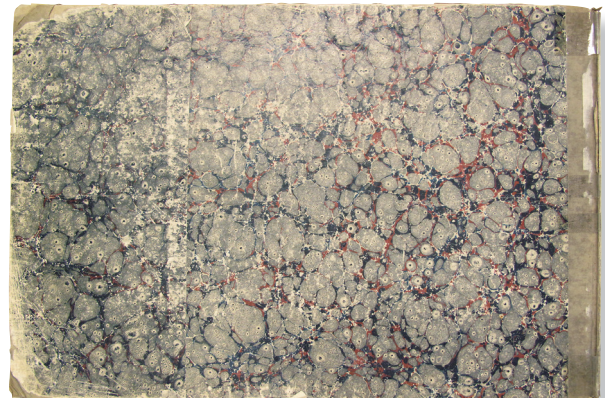


ライデン民族学博物館蔵

台紙ごと切り離された風景画(富士山)



アルバムの裏表紙



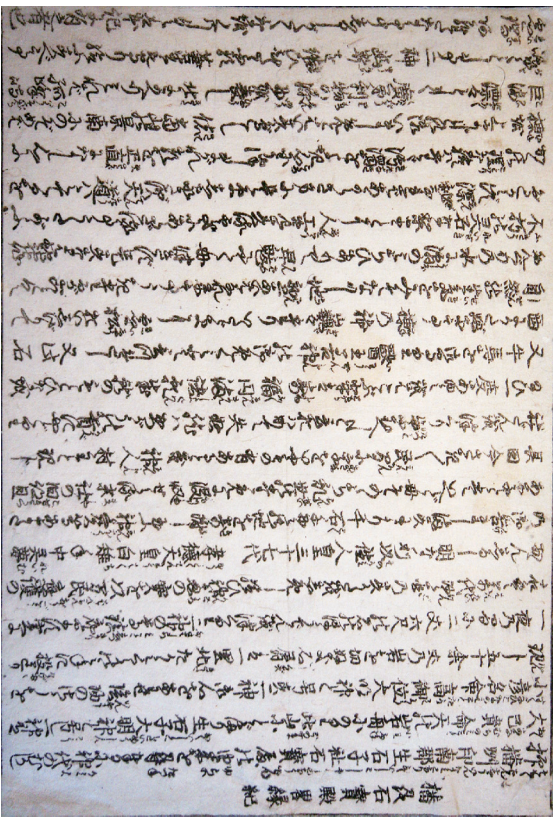


曾根の松実生図



フランドンシュタイン城博物館蔵

播州石宝殿略縁起



フランドンシュタイン城博物館蔵

背後から見た石の宝殿



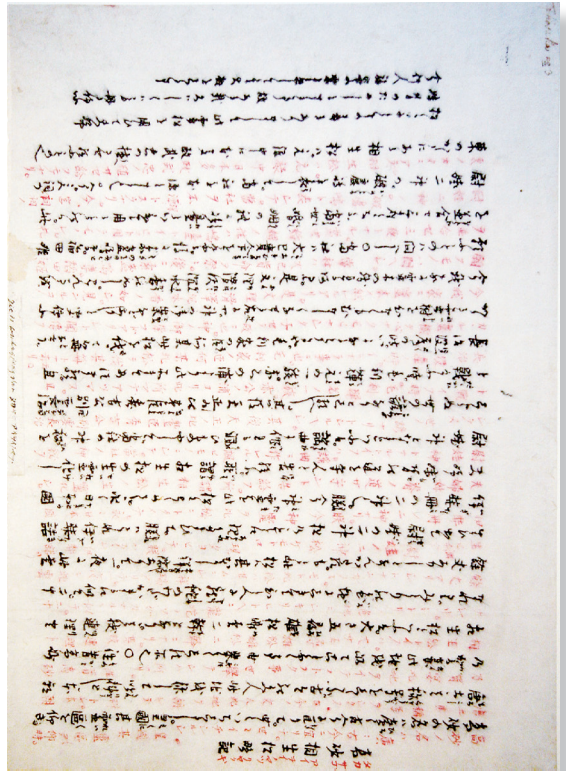
平成22年12月 撮影

牛馬安全 御札



フランドンシュタイン城博物館蔵

高砂相生松略記



ナラデンシユクタウン城博物館蔵

播州高砂尾上相生古松由来



ナラデンシユクタウン城博物館蔵

高砂相生古木之図



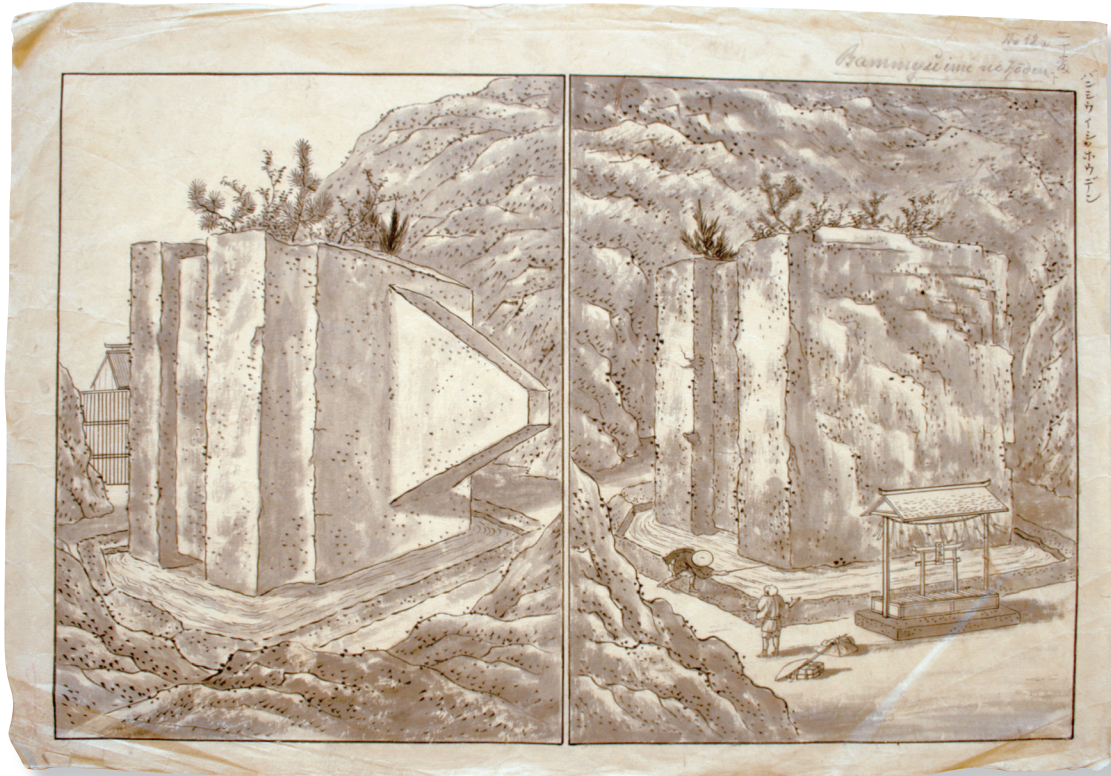
ナラデンシユクタウン城博物館蔵

播州高砂相生連理靈松古図形



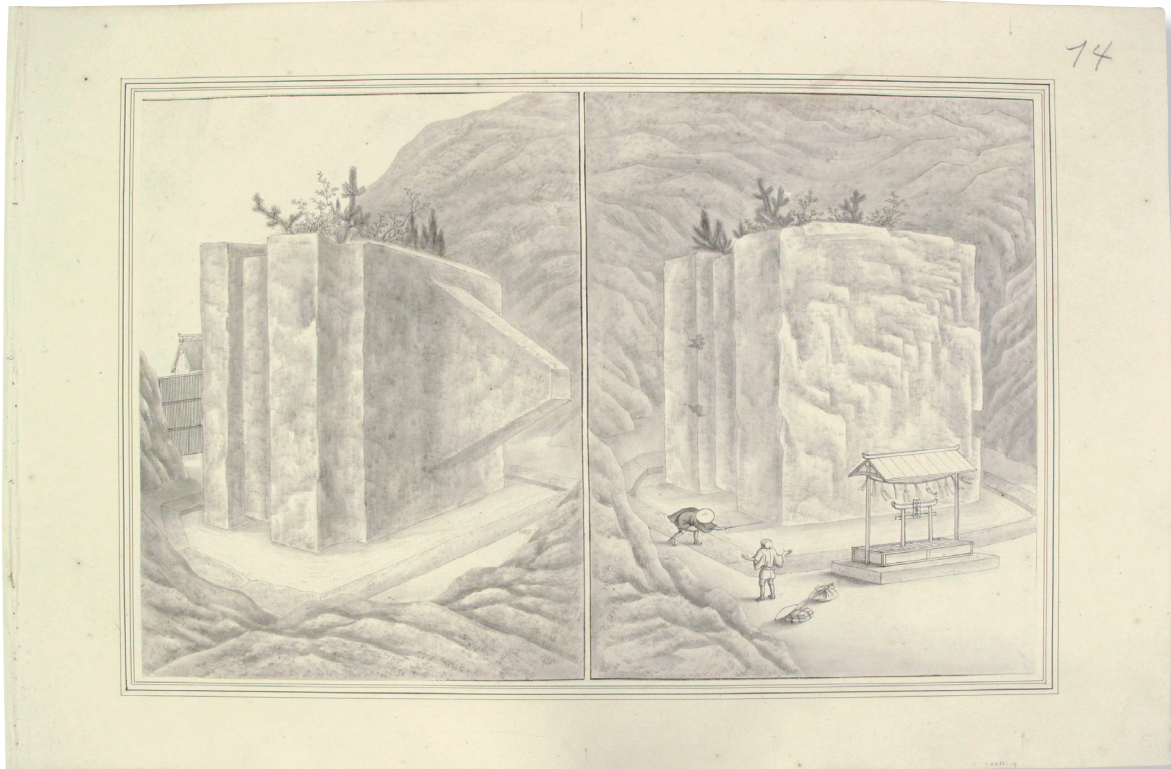
ナラデンシユクタウン城博物館蔵

〔7〕 石の宝殿(川原慶賀,和紙,墨)



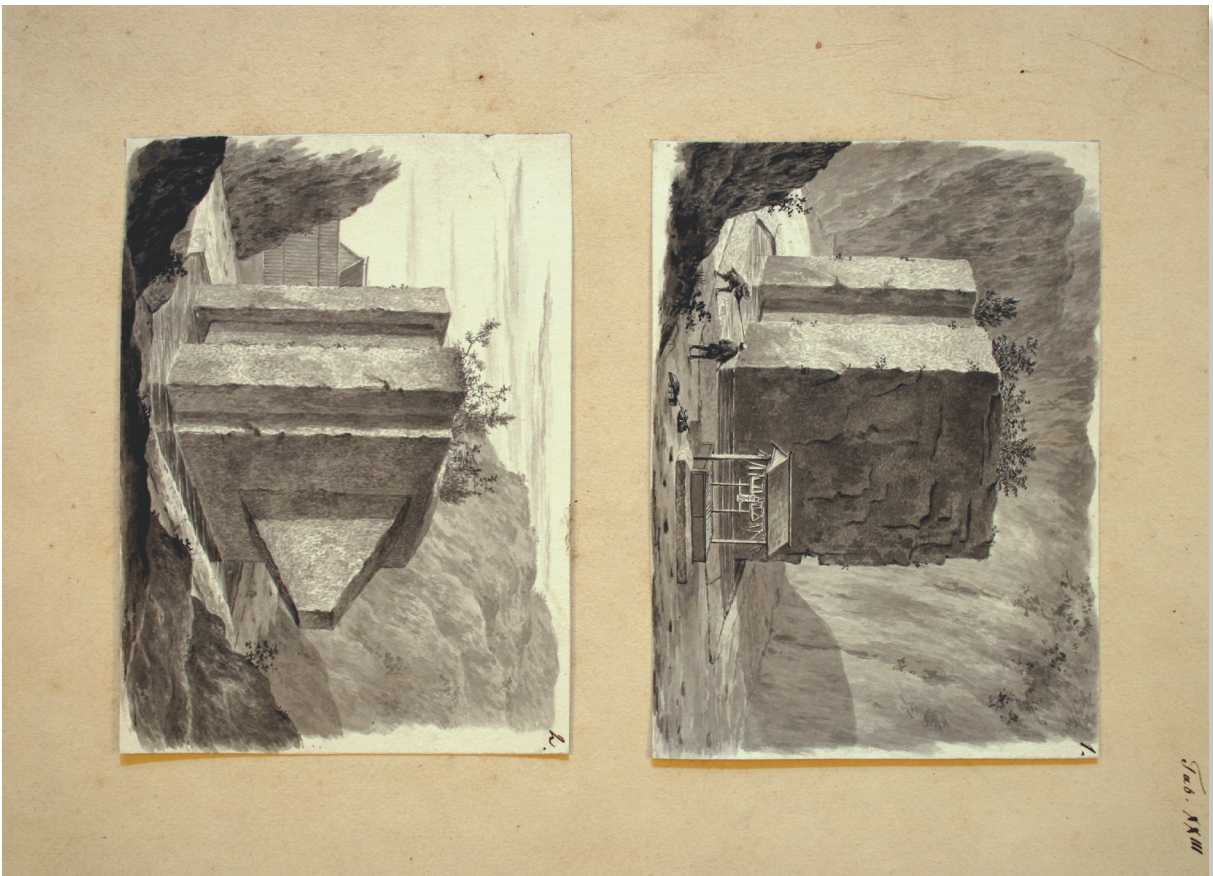
ブランデンシュタイン城博物館蔵

〔8〕 石の宝殿(川原慶賀,洋紙,墨)



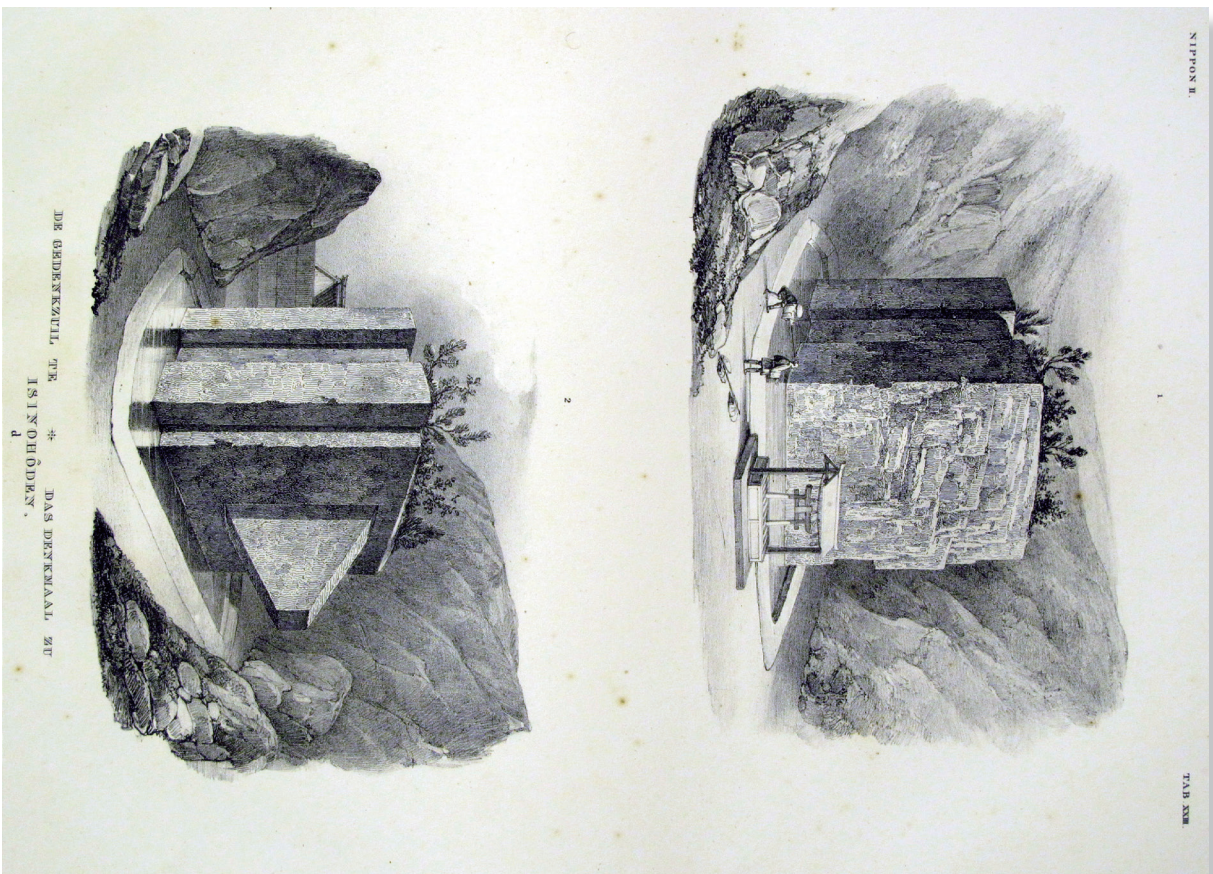
ライデン国立民族学博物館蔵

〔9〕 石の宝殿 (NIPPON 図版の下絵)



Tab. XIII

〔10〕 石の宝殿 (NIPPON 図版)



NIPPON II

TAB. XIII

DE OORDEKZUUL, TER \* DAS OORDEKMAAL, ZIT  
ISINOKURUEN, P

フロンテンシュタイン城博物館蔵

九州大学付属図書館医学分館蔵